王ニ詔ヲ傳ヘ、參軍以下將校兵卒ニ至ルマテ物ヲ賜フコト差アリ、尋テ又侍從片岡利和ヲ戰地ニ派遣シ、皇太后皇后親製ノ綿撒絲ヲ以テ、戰地病院ニ賜フ、衆皆感泣ス、三月三十一日、車駕京都ヲ發シ、大阪鎭臺ニ幸ス、太政大臣三條實美、內閣顧問木戸孝允等扈從ス、陸軍々醫正石黑忠悳死傷者ノ情況ヲ奏ス、天皇之ヲ悼ミ、特ニ傷者ニ就テ親シク慰問ス、五月七日、皇太后京都ヲ發シ、陸路東京ニ還幸ス、二十六日、內閣顧問木戸孝允京都ニ薨ス、天皇京都ニ幸スルヤ孝允之ニ從フ、西南ノ變報京都ニ達スルニ及ヒ、孝允慨然トシテ自ラ征西ノ任ニ當ランコトヲ奏請ス、天皇勅シテ曰ク、汝孝允朕ノ股肱タリ、宜シク左右ニ侍シテ輔翼スヘシト、孝允感泣措カス、日夜國事ヲ憂フ、遂ニ病ヲ發シ、月ヲ越エテ益篤シ、十九日、天皇親シク病床ニ臨ミ、之ヲ慰問ス、二十五日、勅シテ勳一等ニ叙シ、旭日大綬章ヲ授ク、是ニ至リテ薨ス、天皇宸悼措カス、侍從鍋島直彬ヲ遣ハシ、正二位ヲ贈リ賻ヲ賜フ、皇太后皇后亦金幣ヲ賜フ、勅シテ靈山ニ葬ラシム、此時駐輦數月ニ亘リ、軍事多端、機務蝟集ス、有志者以テ宸憂ヲ奉慰セント欲シ、府下寶物ヲ陳列シ、天覽ニ供セントス、六月十二日、車駕京都博覽會場ニ幸シ之ヲ觀ル、社寺人民爭ヒテ其重寶ヲ出シ、名品最モ多シト云フ、十八日、修學院ニ行幸ス、親王大臣及ヒ麝香間祗候ヲ召シテ陪食ヲ賜フ、二十八日、上京第二十九、下京第二十四ノ兩小學校ニ幸シ、親シク生徒ノ肆業ヲ覽ル、是ヨリ先キ官軍已ニ熊本城ニ入リ、軍威大ニ振フ、賊連戰連敗シテ日向及ヒ鹿兒島ニ走リ、掃蕩期スヘシ、此ニ及ヒ七月二十八日、天皇皇后ト俱ニ海路東京ニ還幸ス、尋テ西鄕隆盛城山ニ自盡シ、西南亂平ク、（京都府記錄、國史眼、西南戰史、）

琵琶湖疏水工事

琵琶湖疏水ハ、近江琵琶湖ノ水ヲ引キ、京都ニ通スルノ工事ニシテ、其目的ハ水力ヲ籍リテ機械ヲ運轉シ、以テ工作製造ノ法ヲ改良シ、水利ヲ開通シテ、舟揖ノ便ヲ興シ、以テ運輸ノ業ヲ擴充シ、灌漑ヲ通シ、旱損ノ田畝ヲ潤シ、水車ヲ設ケ精米ノ用ヲ足シ、市街ニ通水シ井水ヲ補ヒ、兼テ火防ニ資シ、下水ヲ利シ汚穢ヲ洗滌シ、衞生ノ利ヲ興ス等、數個ノ目的ヨリ起リシ者ニシテ、其要ハ以テ京都ノ利源ヲ啓キ、衰頹ヲ挽回シ、永遠ノ洪利ヲ圖ルニアリ、明治十四年北垣國道京都府知事ニ任シ、熟考深謀、此工事ノ京都ノ爲メ緊用缺クヘカラサルヲ知リ、四月屬官ニ命シ、大津ナル琵琶湖ノ水涯ヨリ長等山ヲ貫キ、藤尾ニ出テ山崎ニ沿ヒ、日岡ヲ貫キ南禪寺ニ出テ、岡崎ヲ過キ鴨川ニ接スル本線及ヒ南禪寺ヨリ如意山下ニ沿ヒ淨土寺ニ出テ、高野川賀茂川ヲ過キ、小川頭ニ至ル支線ノ高低實測ヲ爲サシメシニ、落差百四十尺ヲ得テ、水力利用ニ適スルヲ知ル、是ニ於テ工事起

業ノ計畫ヲ立テタリ、抑其疏水引用ノ事ハ古來相傳フ、豐太閤曾テ其計畫アレト功ヲ果サスト、又知恩院南禪寺等ニ、湖水疏通ノ圖ヲ傳フレト、何ノ時代何人ノ計畫セシ者ナルヲ審ニセス、維新前復タ其說アリシカ、事ヲ起スニ及ハス、古來其利ヲ知ルト雖モ、能ク其業ヲ建ル者ナシ、此ニ於テ北垣國道大ニ見ル所アリ、其事業ノ必成ヲ斷シ、先ツ勸業咨問會ヲ開キ、市中ヨリ名望資產アル者五十名ヲ召集シ、其計畫案ヲ以テ意見ヲ諮詢ス、實ニ明治十六年十月ナリ、尋テ其工費金六十万圓議案ヲ製シ、上下京聯合區會ニ附シ、其贊同ヲ得テ以テ內務省ニ申稟セリ、然ルニ內務省ニ於テハ、其計畫ヲ調査シ、更ニ實地ヲ測定シ、完全ノ工事ヲ成スニハ、更ニ六十五万圓ノ費用ヲ要スル豫算ナルヲ以テ、更ニ百二十五万圓ノ豫算案ヲ立テ、聯合區會ニ附議シ、其協贊ヲ得テ、其費用ハ已ニ決セシカ、大阪府滋賀縣ニ於テ、水事ニ付故障アリ、其事ヲ以テ內務省ニ上申セルニ因リ、兩府縣ト協議シ、其兩地水防工事ノ費用ハ、別ニ支出スルコトトシ、再三內務省ニ上申ノ上、十八年一月起工ノ特許ヲ得タリ、其費用ノ支出ハ、國庫ヨリ補助十五万圓下賜アリ、府廳ヨリハ勸業資金中十五万圓ヲ支出シ、聯合區會ハ此補助金三十万圓ト、兩區ニテ有セル恩賜產業基金卅九万圓ヲ加ヘ、之ヲ其工費ニ充テ、其不足ハ、市民ヨリ徵收スル事ニ決シタリ、其工事ニ係ル職員ハ、新ニ疏水事務所ヲ置キ、書記官ヲ以テ所長トシ、司計長ハ兩區長、理事ハ屬官、工師ハ測量師技術官、其他所員若干名ヲ置キ、又聯區會ヨリ常務員七名ヲ撰出セシメ、工費出納事業施行等ノ諮問ニ答シムルコトトス、此年八月大津三尾神社京都八坂神社ニ於テ、起工奉告祭ヲ行ヒ、天智桓武兩帝皇靈及ヒ沿道產土神ノ靈ニ奉告シ、第一シヤフトヨリ起工シ、日夜勤勉以テ其業ヲ督勵シ、著々工程ヲ進メタリ、廿一年十月ニ及ヒ、工師田邊朔郎ト區民總代高木文平ヲ米國ニ派遣シ、水力使用ノ方法、器械ノ運轉ヲ調査セシム、水力ヲ應用シ、電氣ヲ起シ、以テ工藝製作ノ便ヲ開カンカ爲メナリ、廿二年法律改正ノ爲メ上下京區會ハ消滅シ、本事業ハ京都市參事會ノ管理ニ歸セリ、同廿三年三月工事略成ルヲ以テ、四月一日、三尾神社八阪神社ニ於テ竣功奉告祭ヲ行フ、起工式ノ時ノ如シ、此月初旬天皇皇后兩陛下京都行幸アリ、乃チ疏水竣功式ニ臨幸ヲ奏請シ、同九日式場ヲ聖護院町閘門中嶋ニ設ケ、兩上ハ先ツ大津ニ行幸シ、築地及ヒ閘門天覽、其ヨリ御代覽トシテ、熾仁親王彰仁親王ハ、閘門ヨリ舟ニテ水路ニ沿ヒ工事ヲ一覽アリ、四大臣之ニ從フ、兩陛下ハ陸路蹴上ニ還幸、更ニ疏水川路ニ沿ヒ、式場ニ臨御アリ、兩親王諸大臣以下之ニ陪ス、京都府知事北垣國道市參事會員市會議員ヲ率ヰ、進ミテ奏文ヲ、捧讀シ、工事成蹟表ヲ上ル、其表文ニ曰ク、

臣國道誠惶誠恐頓首頓首謹テ奏ス、伏テ惟ルニ陛下即位以來、精ヲ勵シ治ヲ圖リ、百廢具ニ擧リ、物ヲ開キ務ヲ成シ、庶蹟咸ナ熙マル、而シテ聖性慈仁尤モ軫念ヲ民瘼ニ垂レ、兢々業々、惟タ一夫モ其所ヲ得サランコトヲ恐ル、一視ノ仁、四海隔テナシト雖モ、天澤ノ加フル所、蓋シ近ヨリ先ニス、況ヤ千有餘年列聖ノ舊都ニ於ルヲヤ、曩ニハ車駕ノ東遷シ給ヒシヨリ、茲ノ京都ノ狀タル、形勝舊ノ如シト雖モ、事勢丕ヒニ變シ、土地凋弊、民物衰颯、徒ニ平安京ノ名ヲ存シ、復タ輦轂ノ下ノ實ナシ、大ニ民產ヲ蕃殖スルニ非サルヨリハ、闔京將ニ生理ヲ喪失セントス、陛下其然ルヲ恤レミ、嘗テ內帑鉅萬金ヲ恩賜シ、以テ殖產興業ノ基本ニ充テシメタモフ、其深仁厚澤、孰レカ感戴體認、之ヲ利用スルノ道ヲ精思セサルヘケンヤ、是ヲ以テ臣職ヲ府知事ニ奉スルノ初メ、首トシテ殖興ノ策ヲ講シ、利用ノ道ヲ思ヒ、始メテ湖水疏導、城江通漕ノ一案ヲ立テシニ、幸ニ人民異議ナク、廟堂之ヲ認可セラレ、遂ニ欽准ヲ蒙リ、且ツ特旨ヲ以テ、年々國庫ノ補助ヲ恩給シタマフ、是ニ於テ去十八年八月ヲ以テ工ヲ起シ役ヲ興シ、夙夜董督、今ヤ則チ竣功ヲ告ルニ際シ、陛下方サニ六師ノ大閱ニ事アツテ、元戎啓行、既ニ陸海軍ノ對抗ヲ統監シ、尋テ本地ニ巡幸シタマフニ遭遇ス、臣等遙ニ旌旆ノ盛容ヲ想望シ、又近ク簞壺ノ嘉會ヲ得、乃チ本日ヲトシ、恭シク鑾輿ヲ工場ニ導迎シ、以テ通水開漕ノ式ヲ擧行ス、夫レ工事ノ巨大此ノ如ク、經費ノ浩繁此ノ如キヲ以テ、未タ數年ヲ出テスシテ、既ニ其成ヲ今日ニ樂ムヲ得ルコト、誠ニ陛下舊都ヲ顧念スルノ切ニ、居民ヲ軫恤スルノ深キニ由ルニ非スンハ、復タ何ヲ以テカ此ニ至ラン、天恩廣大万分ヲ圖リ難シト雖モ、冀クハ將來マス〳〵恤民ノ聖旨ヲ奉體シ、疏水ノ利用ヲ增進シ、產業ヲ闔府ニ興殖シ、凋衰ヲ盛時ニ挽回シ、果シテ平安京ノ實アラシメハ、是レ聊カ陛下從來ノ深仁厚澤ニ對答シ奉ツルニ足ランカ、抑モ臣又伏テ惟ルニ陛下久シク武ヲ偃セ文ヲ修ムト雖モ然レトモ又安ニ居テ危ヲ慮リ、治ニ居テ亂ヲ忘レス、將ニ兵力ヲ無事ノ日ニ奮張シ、國威ヲ薄海ノ外ニ宣揚シタマハントス、即チ前日大閱ノ盛擧、亦以テ聖慮深遠ノ一端ヲ窺フニ足レリ、顧フニ强兵ノ基源、固ヨリ富國ニ在テ食ヲ足スコト尤モ兵ヲ足スノ先務タルトキハ則チ臣マスマス殖產興業ノ一日モ忽ニスヘカラスシテ、水利ノ事業亦頗ル富强ニ關係アルヲ見ル、陛下尙武ノ夙旨モ、亦蓋シ玆ニ外ナラサルヲ知ル、此レ又臣區々ノ志、日夜汲々トシテ此工事ニ奮銳スル所以ナリ、若シ夫レ工事ノ綱要、物料ノ統計ハ、錄シテ別表ニ在リ、天覽ヲ賜ハヽ、幸甚、臣國道誠惶誠恐頓首頓首謹奏ス、明治二十三年四月九日京都府知事從四位勳三等北垣國道、

成蹟表ノ概略

一幹線水路　延長六千百七間七厘

築地　二所

運河　五所

第一　四百二間四分四厘

第二　二千二百七十三間一分四厘第三　百四十五間二分

第四　九十二間二分九厘　第五　九百九十八間五分

閘門及堰門　各二所　架橋　十五所

隨道　三所

第一　千三百四十間　第二　六十八間五分

第三　四百六十七間

井狀坑　二所　舟溜　七所

水路橋　一所　インクライン長三百二十間

一支線水路　延長四千六百十五間一分九厘

枝線水路　五所

隧道　三所

第四　七十五間

第五　五十六間

第六　百間

水路閣　五十一間二分五厘　水溜　三所

架橋及樋路　各十餘個所　伏樋　二所

一水理經畫

幹線

水量（一秒時間）三百立方尺　速力（仝上）三尺ヨリ四尺

水面

運河　十九尺ヨリ六十尺　隧道　十六尺

水深

運河　五尺　隧道　六尺

句配

湖岸ヨリインクライン上マテ二千分一ヨリ三千分一

インクライン十五分ノ一

インクライン下ヨリ鴨河マテ水平

支線之ヲ略ス

工費總高（但シ十七年度ヨリ二十三年度マテ決議額）

金百十九万九千百八十六圓六十八錢八厘

人夫　四百万人　土地買上　八十町六反歩

堀鑿土石　十二万五千立坪　築立土積　四万五千立坪

使用物料

煉瓦　千四百五十万個　木材　五百万才

石材　二万六千平坪　火藥　七千貫目

電管　二十八万發　導火　五十七万尺

粘土　六千立坪　セメント　二万五千樽

輕便鐵道　十哩　蒸氣鑵　七個

石炭　五百五十万斤

附記

明治十四年以降、京都大津間ノ測量、及水路ノ撰定ニ着手シ、十六年勸業諮問會ヲ開キ、起工ノ可否ヲ諮問シ、又工費ノ支辨法ヲ上下京聯合區會ニ付議セシニ、孰モ全會一致ノ贊成ヲ得、同十八年一月、起功ノ特許ヲ蒙リ、同六月起功式ヲ行ヒ、六個年ヲ期シテ成功ノ目的ト爲シ、同八月始テ工事ニ着手シ、爾來四年八個月ヲ閱シテ竣功ス、

勅語

疏水ノ工事竣ルヲ告ク、吏民協戮ノ功洵ニ嘉ス可シ、從來我國美術工藝ノ盛ナル此土ヲ最トス、自今此水利ニ籍テ以テ、人工ヲ資ケ、倍精良ヲ加ヘ、他日ノ殷富ヲ期セヨ、

明治廿三年四月九日

還御ノ路次、府會議員及ヒ都下高齡者ニ拜禮ヲ許サレ、此日行幸拜觀及ヒ盛擧ヲ祝スル爲メ、萬衆群ヲ爲シ、歡呼地ヲ動セリ、同日午后、式場ニ於テ賞與式ヲ行ヒ、即夜大宴會ヲ開キ、皇族大臣ヨリ此事ニ關スル者數百人ヲ招キ、大宴樂以テ之ヲ慶ス、種々ノ餘興ヲ催シ、非常ノ盛擧タリ、尋テ工事ノ爲メ死亡セシ者ノ追福會ヲ執行シ、臨濟七本山管長ヲ請シ、其式ヲ行ヒ、北垣氏自ラ文ヲ作テ之ヲ祭ル、其後鴨川運河水利工場等漸次落成シ、二十七年八月ニ至リ、全部ノ成功ヲ告ク、着手ノ當初ヨリ、年ヲ積ムコト九年、經費計百七十萬圓ニシテ、此ノ大工事ノ終局ヲ見ルニ至レリ、鴨川運河ハ、聖護院舟溜閘門ニ起リ、鴨川東岸ニ沿ヒ、南下シテ七條鐵道橋ヲ過キリ、鴨川ト別レ、伏見墨染ノ南インクラインヲ下リ、堀詰ヲ經テ、宇治川ニ合流ス、延長五千七百九十九間、河幅最廣四十八尺、最狹二十尺、一秒時間流量百二個、橋梁四十ケ所、閘門堰門各八ケ所、舟溜五ケ所、インクライ

ルン一個所、長百二十間、勾配十分ノ一、附屬鐵管一條長百三十間、內口徑三尺ナリ、凡舟ノ上下スルニハ、閘門堰門ヲ開閉シ、水力ヲ平均シテ、止水ノ上ヲ行クカ如クセシムル等裝置極メテ奇巧ナリ、目下運河ニ由リ、京津及ヒ京伏間ヲ復往スル貨物運送船ハ、平均一日五十餘艘、客船百餘艘、明治二十七年中、京津間物貨運送積量二十八萬二千餘駄、乘客拾五萬餘人ニシテ、漸次增加ノ勢アリ、

水利工場ハ、水力ヲ利用シ電氣力ヲ發シ、加倍ノ力ヲ生シ、運用自在ナラシメ以テ、遠隔ノ工場ニ利用セシムルモノニシテ、南禪寺インクランインノ傍ニ在リ、幹線已ニ第三隧道ヲ出テ蹴上ニ至レハ、地形忽チ傾斜シテ、十五分一ノ急勾配ヲ成シ、水壓利用ノ大働力ヲ生ス、全水量三百個ノ中、五十個ハ蹴上ヨリ分岐シ支線ト爲リ、第四隧道ニ入リ、二百五十個ハ、內口徑三尺ノ大鐵管二條ニヨリ、水利工場ニ至リ、ベルトン水車ヲ運轉シテ、發電ノ素力ヲ生ス、現時發電機ハ、百馬力ノモノ十三臺ニシテ、インクランイン上ニ、船艇ヲ上下セシムルドラム機關運轉用ヲ始メ、電氣鐵道、電燈、織物、絲絲、紡績、揚水、時計等、市內外ノ各工場ニ至リ、只一條ノ電線ヲ架シ、數里外ニ於テ巨大ノ機關ヲ運轉ス、靈妙活脫ノ機巧人ヲ驚カス、目下使用馬力一千馬力ニ及ヒ、明治三十年ニ至レハ、全力二千馬力ヲ使用シ盡クシ、一年ノ收入十二萬餘圓ニ達スヘキ豫算ナリト云フ、現時直接水力ヲ使用セル水量ハ、三百個ニシテ、精米、撚絲、鍛冶、電線、等ノ製造ニ使用シテ、皆好結果ヲ得タリ、夫レ此工事タルヤ、希世ノ大業ニテ其進路ニ橫ハレル妨碍極メテ多シ、然ルニ北垣氏淬勵拮据、百難ニ當リ萬阻ヲ排シ、鞠躬盡悴、緩急機宜ニ合ヒ、終ニ能ク其工ヲ遂ケ、測量設計等モ一切外人ノ力ヲ籍ラス、而シテ萬遺策無シ、氏ノ任ヲ去ルニ及ンテ、我市民ハ其ノ志業ヲ繼キ、浩費ヲ拋ケ、此工事ヲ完成ス、然レトモ水力ノ用ハ窮マリナク、利源ノ生スル此ニ止マラス、之ヲ利用善導シテ、無限ノ富源ヲ開キ、財本ヲ殖シ、京都ノ面目ヲ一新シ、以テ深淵ナル天語ニ答ヘ奉ルハ、其責後人ニ在リ、

皇室典範

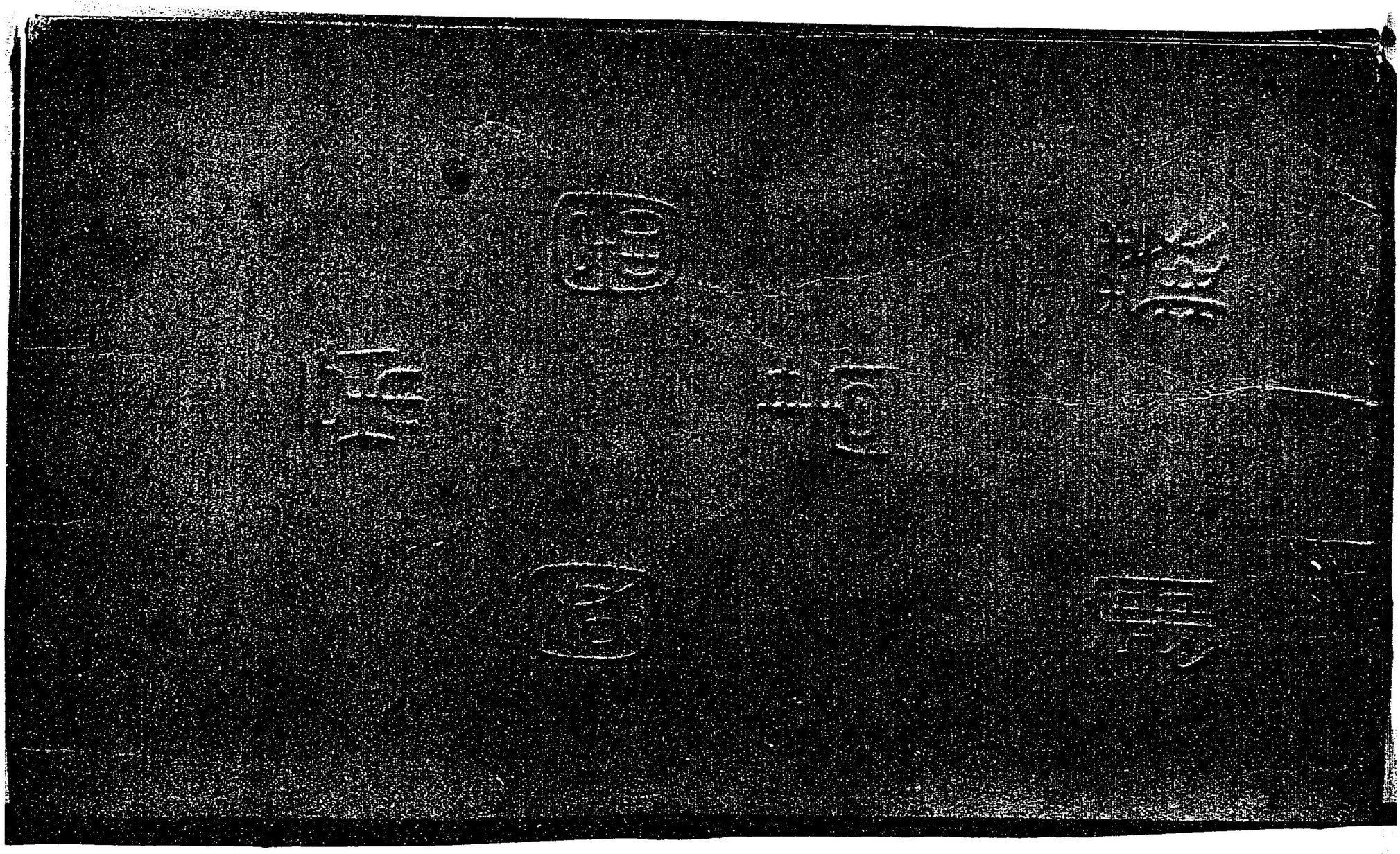
今上天皇踐阼ノ初メ、親カラ群臣ヲ率ヰ、天神地祇ヲ祭リ、五事ノ誓約ヲ立テ、以テ、大ニ國是ヲ定ム、是ヨリ人文益ミ進ミ、國運大ニ開ケ、立憲制度ノ基此ニ定マリ、明治十四年四月、詔シテ國會開設ノ旨ヲ告ケ、明治二十三年ヲ以テ其期トナシ在廷ノ有司ニ命シ、立國ノ大典經世ノ要務ニ基キ、古今ヲ稽ヘ內外ニ徵シ、以テ其條規ヲ創立セシメ、大臣元老ニ勅シ、審議討論天皇親聽以テ之ヲ裁シ、二十二年二月十一日、卽チ紀元ノ令節ヲ以テ、皇祖太神ヲ親祭シ、大ニ皇族大臣及ヒ其他ヲ召集シ、大詔ヲ下シ千古不磨ノ大典タル帝國憲法ヲ發布シ、併セテ皇室典

範十二章六十二條ヲ規定セラレタリ、夫レ憲法ハ國家ノ大典、典範ハ皇室ノ家法ニシテ、至尊ノ皇祖ノ大訓ヲ聿修シ列聖ノ遺訓ヲ祖述シ、以テ後昆ニ垂貽セラル、モノニシテ、誠ニ國家無窮ノ寶典ト瞻仰シ奉ルヘキ所ナリ、今此書ヲ編スルニ當リテ此寶典ヲ捧讀シ、平安京ノ爲メ實ニ慶祝ニ堪エサルモノアリ、謹テ其事ヲ擧クレハ、皇室典範第二章第二條ニ曰ク、即位ノ禮及ヒ大嘗會ハ、京都ニ於テ之ヲ行フト、是レ大禮ヲ敬シ遺訓ヲ恪ミ、千載舊京ヲ重セラルヽ旨ニシテ、固ヨリ贊揚ニ遑アラス、而シテ之カ爲メニ此平安京ノ重キヲ加ヘシハ、實ニ勝テ言フヘカラサルモノアリ、昔者桓武天皇叡聖明哲、大業ヲ廓張シ、雄圖ヲ恢弘セントシ、先ツ此靈地ヲ相シ、山河ノ勢ニ據リ、水陸ノ便ヲ計リ、大ニ都城ヲ營シ、雄壯宏麗、國號ヲ山城ト改メ、新京ヲ平安ト號シ、以テ萬世不易ノ帝都ト奠メラル、世ニ汚隆アリ時ニ盛衰アリト雖トモ、爾來一千有餘年、綿々繼承、以テ明治ノ維新ニ及フ、襟帶山河、依然舊ノ如ク、四神ノ擁護今ニ至リテ、益新タナリ、古今ノ變內外ノ勢ニヨリ、車駕東行スト雖トモ、猶ホ京都ノ大號ヲ存シ、皇宮森嚴寢陵清穆、巍々翼々其觀ヲ改メス、然レトモ物情ノ感スル所、自カラ舊京ノ觀ナキアタハサリシカ、傳ヘ聞ク、明治十年車駕巡幸、姑ク皇宮ニ駐輦アリシ時、後來大禮ヲ行フモノハ、此地ニ於テスヘシトノ旨アリ、因テ勅シテ更ニ宮闕ヲ修理シ、大內保存ノ法ヲ立テシメ、皇室典範ノ制定アルニ及ヒ、特ニ本條ヲ揭ケラレタリト、皇居ハ既ニ東京ニ遷サル、ト雖トモ、平安ノ規模ハ、舊ニ仍リ之ヲ存シ、桓武帝ノ遺範ヲ聿修セラル、聖旨ノ深遠ナル、瞻仰スルニ餘アリ、夫レ即位ノ禮大嘗ノ典ハ、天皇一世一度ノ大儀ナリ、而シテ必ス之ヲ京都ニテ行ハル、コト ト規定セラレ、載セテ寶冊ニ在リ、天祖ノ懿訓ト、桓武ノ洪謨ト共ニ、無窮ニ垂レ、皇運益隆盛ニシテ、京都滋富庶ナルヲ徵スヘシ、是レ獨リ王室ノ爲メ慶スヘキノミナラス、豈京都ノ爲メニ祝セサルヲ得ンヤ、（日本紀畧、大政紀要、皇室典範義解參照、）

卷	枚	表裏	誤	正
五十三	二	表	シシ	シテ
	七	表	麼シテ	麼シテ
	十三	表	通ヘシ	通スヘシ
	十七	表	昧早	昧爽
	廿五	表	移シテ、ク日	移シテ日ク、
五十四	四	表	辨髪	弁髪
	七	表	銅鳥	銅鳥
	十五	表	伏テ	伏テ
	十九	表	答ヘ	答ヘ
五十三	四	表	四	八
	八	表	宿稠	宿稠
	十五	表	例	例
	十八	表	順峙	順時
五十四	七	表	七	十二
	十二	表	五百	五百十
	十七	表	隨道	隧道
	十九	表	至リチ	至リテ
五十三	二	裏	あらて	おひて
	七	裏	要衝	要衝
	十一	裏	宿稠	宿稠
	十六	裏	例	ノ例
	廿二	裏	順峙	順時
五十四	六	裏	一千二百	六百九十
	七	裏	五百	五百十
	十四	裏	辱クシ	辱クシ
	十八	裏	隨道	隧道
		裏	至リチ	至リテ
五十三	六	裏	合ヒシト	合ヒシ
	十一	裏	皇官	皇宮
	十六	裏	其卑	某卑
	廿二	裏	藩翰	藩翰譜
		裏	公明	公明
		裏	コト、ヲ得ス	コトヲ得ス
五十四	七	裏	朝儀	朝職
	十四	裏	舟揖	舟楫
	十八	裏	絲絲	撚絲

平安通志卷之五十四

110
10
60



平安通志

十七、十八

110
合10
60